



教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1996
発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

典礼

キリスト者の

生活の頂点

◆第二バチカン公会議をふりかえる(5)

◆ 公会議が導入した典礼上の変化は、まだ記憶に新しいところですが。キリスト信者もそうでない人も、典礼刷新に取り組んだ公会議の進取の空気に強い印象を受けたものです。

「典礼憲章」は一九六三年十二月に採択されました。それはある意味で第二バチカン公会議の「最初の実り」でした。礼拝の外的な改革にとどまらず、キリスト教共同体に典礼をもう一度見直させようとしたのです。「典礼は教会の活動が目指す頂点であり、教会のあらゆる力が流れ出る泉である。」(10番) 確かに、公会議も認めるように、典礼が全てではありません。(9番参照) 典礼は教会生

活の様々な局面の一つであると同時に、キリスト信者に対してたえざる改心、形成、堅忍、あかしを要求します。しかし個人と共同体にとって、典礼がまことに中心的な存在であることを見落とすわけには行きません。

◆ 典礼がなぜ中心となるのか、典礼を救いの歴史の枠組みの中に位置づけた公会議文書の中で明確に説かれています。他のいろいろな祈りに比べ、典礼の祈りは独自の地位を占めています。教会の公的な祈りだからと言うだけでなく、何よりもしるしを通じて神が人間の救いのために行なわれた偉大なわざを実際に再現し、ある意味で続行するものだからです。

これは、とりわけ秘跡について、特に聖体について言えることです。聖体の秘跡ではキリストご自身が最高の司祭として、また新約のいけにえとして現存します。一度だけ起こったキリストの死と復活は、秘跡として再現され、儀式の中で繰り返されます。このようにして、典礼を祝う教会は恩寵の受け手となるばかりでなくその媒体ともなり、正しい心構えで秘跡にのぞむ者なら誰でも、そこから聖化と救いの実りを受けることができます。

◆ 典礼をさらに一層、意味深く効果的なものにとりかえようという公会議の教えはまことに賢明です。儀式はその教理上の意味と結びつけられ、新たな熱意で神のみことばの宣言を満ちし、信者の生き生きとした参加を促します。また、さまざまなカリスマと教会活動の豊かさを示すと共に、典礼がキリストの行為でもあり教

◆ 会の行為でもあることを雄弁に語る、さまざまな形の異なった奉仕職をも促します。さらに、典礼様式を各国の言葉や文化に適応させる動きは決定的でした。教会が典礼においても普遍的な性格を備えていることを示すこの上ない事例です。こうした変革を経ても、教会は伝統から切り離されることなく、かえって伝統の豊かさとその要請をそっくり訳し、伝えました。

◆ 新しい契約の源として生きた、祝された処女を仰ぎ、「愛と真理をもって」(ヨハネ4・23)行われる新しい形の礼拝に加わりましょう。あらゆる意味で典礼を生活に生かし、天上での礼拝に声を合わせる事ができるよう、聖母に助けを願いましょう。何よりも心から典礼にあずかることができるよう、祝うことができるよう、私たちを励ましてください。聖性の光に生涯が照らされ、全教会が理想の姿にかわりますように。(九五・十一・十二)

主は苦しみを聖化される

教会シリーズ 35

1 苦しみという現実はいつも私たちの前にあり、しばしば一人ひとりの身体と靈魂と心にのしかかっています。信仰のない所では、苦しみは常に人間存在を脅かす謎です。でもイエズスが受難と死によって世をあげた以来、新たな見通しが開けました。「私たちが愛し、ご自分を渡された」(エフェゾ5・2)方によって、苦しみを通して自らを与え、限らない愛に達することができるよ

うになったのです。(ヨハネ13・1参照) 今や十字架の秘義の一部となった苦しみを受け入れ、生き抜くことは、キリストの救いのわざへの協力と言えます。第二バチカン公会議は、全て苦しむ人、迫害されている人々は世の救いのために苦しみを忍んだキリストと特に結ばれている、と説明しています。あの山上の説教でイエズス自身、人々の苦しみのさまざまな姿を並べ上げています。貧困、

餓え、迫害、社会からの蔑視、不正な抑圧。世の中を見れば、新旧さまざまな私たちの不幸が至る所で目につきます。では、このような苦しみに満ちた人生で私たちが導く神のご計画と、苦しみ（仕事もそうでした）が持つ救いの価値について考えてみることにしましょう。

2

「苦しみの福音」は十字架において、キリスト信者たちに示されました。イエズスは自らのいけにえが、御父の定めた人類の贖いの道となることを知り、それに従ったのです。イエズスは弟子たちにも、このいけにえにあずかることを告げています。「まことに私は言う。あなたたちは泣き悲しみ、この世は喜ぶだろう。」（ヨハネ16・20）しかし続けて、弟子たちの悲しみは喜びに変わるだろうと言われたのです。「あなたたちは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。」（同）贖いという見地に立てば、キリストの受難は復活に向けられています。人類もまた、十字架の秘義にあずかることで、喜びに満ちた復活の秘義にあずかることとなります。

3

こうした次第で、イエズスは苦しむ人は幸いだ、とためらわずに宣言したので、「悲しむ人は幸せである、

彼らは慰めを受けるであろう。：正義のために迫害される人は幸せである、天の国は彼らのものである。私のために、人々があなたたちをののしり、あるいは責め、あるいは数々の讒言（ざんげん）を言うとき、あなたたちは幸せである。喜びに喜べ、あなたたちは天において大きな報いを受けるであろう。」（マテオ5・5〜12）なぜ幸いなのかは、人の生涯は地上で過ごす期間に限定されるものでなく、後の世の完全な喜びと生命の充満に方向づけられていることを認めて理解できるとでしょう。愛を込めて受け入れるとき、地上の苦しみは、永遠の世界で人間に与えられる神の栄光の輝きである新しい生命の種を内に含んだ、苦い殻のようなものです。あらゆる種類の悪と不幸にひしがれた世の姿はしばしば悲惨の極みとしか言えませんが、それでもより良い愛と恩寵の世界への希望が、その奥に隠れているのです。キリストの御約束にちかかわれた希望を支えに、苦しみの中でも信仰によってキリストに一致する人は、すでにこの世で、人間的には説明できない喜びを経験することでしょう。至福八端の教えにあるように、実に天国はすでにこの世で始まっているので

す。聖トマス・アクイナスによれば、「聖なる人々において、来世の幸福は始まっている。」（「神学大全」II-II, q.69, a.2; cf. II-II, q.8, a.7）

イエズスの苦しみは人間の試練を解き明かす

4

キリスト教信仰が説くもう一つの基本原則は、苦しみが実りをもたらすということ、従って、苦しむ人誰もがキリストのあがないのいけにえに結ばれているということです。このように、苦しみはささげもの、奉獻となります。これは多くの聖なる人々の内で、今でも起り続けていることです。特に、見たところ無意味と思える苦しみに打ちひしがれる人は、イエズスの苦しみに自分の試練の意味を悟り、ゲッセマニまでも彼につき従います。イエズスの姿に、聖なる自己放棄で苦痛を受け入れ、御父に信頼して従う力を見いだすのです。ゲッセマニでのあの祈りが心に響くのを感ずることでしょう。「私の思いのままではなく、あなたのみ旨のままに。」（マルコ14・36）彼らは、捕えられた時のイエズスの決意と神秘的に一致しているのです。「父が私に与えられた杯を飲まないでよかろうか。」（ヨハネ18・11）全て

の人の救いを願って自らの苦痛を捧げる勇気をキリストの姿に見いだし、どんな犠牲も神秘的な実りを豊かにもたらすことをカルワリオでのいけにえから学ぶことができます。イエズスがお教えになったように。「まことにまことに私は言う。もし一粒の麦が地に落ちて死なぬなら、ただ一つのまま残る。しかし死ねば多くの実を結ぶ。」（ヨハネ12・24）

5

イエズスの教えは、キリストの受難にあずかっていることを自ら生き生きと自覚した使徒パウロが証明しています。パウロは、こうしてキリスト教共同体のために協力していることをよく知っていました。彼は苦しみのうちにキリストと一致していたので、キリストの体である教会のために、自分自身の体をもつてキリストの苦しみの欠けた所を満たす、と語る事ができたのです。（コロサ1・1・24参照）あがないの受難との一致によって多くの実を結ぶ、と確信していたので、「死は私たちのうちに働き、あなたたちに命が働く」（IIコリント4・12）と言いつつたのでした。使徒としての生涯は苦難の連続でしたが、パウロはくじけませんでした。患難は希望と信頼を強めました。キリストの

受難こそ生命の源である、と悟ったからです。「キリストの苦しみが私たちにおいて豊かにあるように、キリストにおいて私たちの慰めも豊かである。私たちが患難を受けるとしても、それはあなたたちの慰めと救いのためである。」（IIコリント1・5〜6）このようなお手本を見るにつけ、キリストに従う者たちは、師が教えられた十字架への召し出しをより深く理解します。十字架は各人の人生にキリストの生命を大きく成長させ、教会を富ませる神秘的な実りをもたらすのです。

6

「苦しみの福音」を理解できるはずですが、はつきりとはわからなくとも、どんな時でも苦しみが救いの価値を秘めています。なぜなら「幾世紀、幾世代を通してへ苦しみは特別な力を秘め、内的に人をキリストに近づける特別な恩寵であることが見られた」（「苦しみのキリスト教の意味」26番）からです。キリストに従う人、聖パウロの苦しみの神学を理解する人なら誰でも、苦しみに素晴らしい恩寵、神の愛が結び付いていることを知っています。その恩寵がたとえ苦痛に満ちた運命にさえぎられて、私たちには理解のできないものに見えたと

説教・講話・書簡等の抄訳

教会の成長と聖母

「聖母マリアと教会」シリーズ(4)

しても。苦しみの奥にはまことの神の愛があり、苦しみを受け入れることによって人間をキリストの救いの愛にまで高めようと望んでおられることに気づくのは、確かにたやすいことではありません。でも、信仰の力でこの秘義に近づくことはできません。苦しむ人の魂を平和と喜びで満たしてもくれるのです。聖

パウロと共に、こう言うこともできるでしょう。「私は慰めに満たされ、どんな試練の中にあっても喜びにあふれています。」(IIコリント7:4)

「兄弟である
小さな人々にしたことは…」
キリストの精神を想起する人なら、キリストにな

らって苦しむ人々を助けなければ、と思うはずですが。イエズスは周囲の人々の数えきれない苦しみを取り除きました。この点からもイエズスは完全な模範です。彼は同情と相互扶助を含め、互いに愛し合うことを命じました。善きサマリア人のたとえで、イエズスは苦しむ人のために、自ら寛大に行動を起こす

よう教えています。全て困っている人、苦しむ人のうちにはイエズスがおられ、何であれ貧しい人を助ける行為はキリスト自身に向けられたものであることが示されています。(マテオ25:35-40)

締めくくりとして、皆さんにイエズスのお言葉を送ります。「まことに私は言う。あなたた

ちが私の兄弟であるこれらの小さな人々の一人にしたことは、つまり私にしてくれたことである。」(マテオ25:40)つまり苦しみは、苦しむ人自身を聖化するだけでなく、彼らを助け、力づけようとする人々をも聖化するのです。私たちはいつも十字架の救いの秘義の中心にいるのです。(九四・四・二七)

1 これまで、マリアの母性についての教えが「イエズスの母」という最初の教えから、もっと正確で明快な「神の母」という教えに改められ、人類の贖いへの母としての関わりが明らかにされる様子を見てきました。

マリアに関する教えの他の部分についても、啓示された真理を明確に定義できるようになるまでには、長い時間が必要だったのです。人類の救いのためにマリアが果たした役割をさらに深く理解して行くことは信仰の旅路に似ています。そのよい例が無原罪の御宿りと被昇天の教

義です。これらはご存じのように尊敬すべき二人の前任者、神のしもべピオ九世とピオ十二世がそれぞれ一八五四年と一九五〇年に宣言したものです。

マリア学は神学研究の中でも特別な分野です。マリアへの愛にあふれたキリスト信者は、しばしば前もって、祝された処女の秘義をめぐりいくつかの局面を直感的に見抜き、神学者や牧者たちの注目を引きつけてきました。

2 イエズスの母と救いの歴史
福音書にはマリアの人物や生涯についてわずかし

か語られていないのは事実です。神の御母について詳しく知りたい私たちは、もっと十分な情報があればよかったです。新約聖書の中の他の記述を見ても、私たちの希望は満たされません。マリアに関するはつきりした教えの発展は見られませんが、聖パウロの書簡を見ても、キリストとそのわざについての考察はたくさんありますが、神は御子を「女から生まれさせた」(ガラツィア4:4)という意味深長な一節が見当たらないです。

マリアの家族についてはほとんど言及がありません。イエズスの幼年期の記述を除けば、共観福音書にはマリアに関して参考になりそうな記述は二つしかありません。一つはイエズスの「兄弟」や親類たちが彼をナザレトに連れ戻そうとしたこと

(マルコ3:21、マテオ12:48参照)、もう一つはイエズスの母は幸いであると称賛した婦人への答えです。(ルカ11:27)

しかしルカは幼年期の福音書の中で、お告げ、ご訪問、イエズスの誕生、奉獻、十二歳の時、教師たちに混じって神殿にいたことなどのエピソードを記して私たちにいくつもの重要な事実を伝えてくれただけでなく、非常に興味深い一種の「原マリア論」とも言うべきものを提示しています。ルカの記述は、ヨセフへのお告げというマテオの記述(1:18-25)によって間接的に補足されていますが、それはただイエズスを処女のままみごもったことに関するのみです。

ヨハネの福音書は、救いの歴史の中でイエズスの母が果たした役割がいかに重要なものであったかについて、私たちの認

識を深めてくれます。そこには聖母がイエズスの公生活の初めと終わりに立ち会ったことが記されています。特筆すべきはマリアが十字架のもとにいたこと、御子が最後に愛する弟子と、彼においてすべてのキリスト信者をマリアの母としての配慮に委ねたことです。(ヨハネ2:1-12、同19:25-27参照)

最後に、使徒行録は聖霊降臨を待つ最初の共同体の婦人たちの中でイエズスの母に注目しています。(使徒1:14参照)

しかし、新約聖書にも信頼できる歴史的記録にもそれ以上の記述がないため、聖霊降臨後のマリアの生涯については、死去した時と所をも含めて何もわかりません。おそらく使徒ヨハネと共に住み、最初のキリスト教共同体の発展に深く関わったであろうと想像されるだけです。

説教・講話・書簡等の抄記

3 マリアの地上での生涯についての情報はわずかですが、知られているのは神学の面から重要で豊かな事柄であり、現代聖書解釈学が注意深く解釈してきました。

さらに思い起こすべきは、福音記者の目は全くキリスト一人に向けられており、御母が登場するのは御子を喜びに満ちて宣言することの関わりにおいてのみであることです。聖アンブロシウスが言うように、福音書記者は託身(受肉)の秘義を解説するに当たり、「秘義について説くより処女性の弁護にまわっているかのような印象を与

えるのを避けて、マリアが処女である証拠についてそれ以上詮索をしなかった」(Exp. in Lucam. 2:6; PL 15.155)としよう。

この事実から、聖霊の特別な意図を読み取ることができません。聖霊は、教会があくまでキリストの秘義を中心に据え、マリアの生涯のこまごましたことにとらわれず、救いのわざにおけるマリアの役割とその個人的な聖性、キリスト信者に対する母としての使命を見い出すよう努めることを望んだのです。

素朴な人々の信仰が
マリアの聖性を認めた

司祭の独身制は 神のたまもの

〈考察〉

(…)キリストは天の国話しになりました。使徒たちには次のように仰せになっています。「皆にこの言葉がわかるとは限らぬ。ただそれをわかる恵みを受けた者にだけわかる。」(マテオ19・11) 福音書からわかるように、独身とは個人へ

の賜であると同時に、この賜を受けた人において、彼を通してもたらされる、教会への賜でもあります。

一九九〇年のシノドス(世界代表司教会議)では独身制という賜の価値が再確認されました。ラテン教会の遺産である独身制を守り、福音宣教の使命に寄与させたいという要望が出さ

4

聖霊は、教会がマリア自身のように振る舞うことを期待し、その努力を助けます。イエズスの誕生をめぐって、ルカはその母が全てのことを心にとどめて注意深く考え続けた(ルカ2・19)、すなわち自分が見聞きした全ての出来事を深い視点で組み立てようと努めたと述べています。

同じように、神の民もマリアについて言われた全てのことを深く理解し、キリストの秘義と密接に結び付いたマリアの使命をより良く知るよう、聖霊に促されています。

マリア学の発展に伴い、キリ

スト信者自身の役割も明らかになってきました。信者は自らの信仰の確認と証言を通じて、マリアに関する教えを進展させる力となります。キリスト信者の信仰の所与(信仰が与えるもの)と経験をより深め、つまびらかに説明する神学者の働きは必要不可欠なものです。マリア学の進歩発展は通常、神学者だけの仕事ではないのです。

イエズスは素朴な人々の信仰をほめ賛え、御父の驚くべき慈愛の表われをそこに見取っています。(マテオ11・25、ルカ10・21参照) 何世紀にも渡り賢い人々の目からは隠された、救

いの歴史の不思議が示されています。このような信仰は、聖なる処女の素朴さと相まってマリアの聖性とその母性の超越的価値への認識を高めてくれます。

マリアの秘義は、全てのキリスト信者が教会と一致して、福音の啓示するキリストの御母の姿を「心にとどめて考え続ける」よう求めています。マニフィカトの教えに従い、マリアにならない、各自が神の愛を経験し、「恩寵に満ちみちた」女性を通して働かれた聖なる三位一体のすばらしいわざに、神の慈しみ深さを見出すことができるでしょう。(九五・十一・八)

れたのです。シノドス後の使徒的勧告「現代の司祭養成」(パストレス・ダボ・ヴォピス)にそれが十分に表明されています。この文書にはシノドス教父たちが述べたことのまとめと、その最終提案が収められています。シノドスに参加した人々は、世界各地から集まった司教方一人ひとりが証していた司祭の独身制のすばらしい価値を忘れることはできないでしょう。このような証はシノドス全体に特有の調子をそえました。

これら全てが、「私たちのうちにこのすぐれたわざを始め、それを完成に導いてくださる」

(フィリッピ1・6参照) 御方への信仰と信頼を与えるはずです。従って私たちとしては、霊的賜をお与えになる神への信頼にあふれていることが条件です。この信頼は、教会への召し出しが特別な危機にさらされている場合、とりわけ重要となります。世俗化が進む世界では、社会全体の風潮が危機を生み出しています。時には、教会をその主人であり配偶者である御方への忠誠から引き離すことを目的とする謀略があるのではないかとさえ思わざるを得ません。

それでもキリストご自身は約束を守られますし、聖霊を通して

てその力を示されます。こうして、この世の精神に打ち勝ち、神の国のための独身がどんな人間の弱さや謀略にも負けない人生の選択であることを知るのです。がっかりしさえしなければ、あるいはこの召し出しとその選択に失望落胆の意味合いを持たせなければよいのです。カトリック教会は他の伝統、特に東方教会の伝統を尊重しますが、自身としては受けた賜に忠実にとどまり、主からの贈り物として大事に保つことを望んでいます。このような忠実と熱心な祈りは、どんなに困難な状況にあっても、司祭職への道を開

いてくれるでしょう。

私は今、使徒的勧告「現代の司祭養成」を念頭において話を続けています。同時に全教会へ、また特別な意味で教会の牧者たちへ向けられた心からの訴えを述べているのです。第二バチカン公会議とそれに続くシノドス（世界代表司教会議）は、何世紀にも渡る伝統を確認しましたが、特に司祭の形成に関しては、私たち全員の「刈り入れの主」（マテオ9・38）への忠実と信頼が求められている、と述べています。

普遍教会にとって、司教たちの連帯は召し出しの不足に悩む教会間の「賜の交流」を通じて解決策を見出し、そうした教会を助けることができます。「互いに愛し合うなら、それによって人はみな、あなたたちが私の弟子であることを認めるだろう」（ヨハネ13・35）とはキリストの言葉です。司教たちの一致は、まさにこうした互いの愛、どのように仕え、また贈り物を受け取るべきかを知る愛のうちに見出されるのです。

〈教皇さまの祈り〉

「私はあなたたちに牧者をもつて全教会は「刈り入れの主」である御方を仰ぎ、大勢の働き人を送ってくださるよう

と願います。（マテオ9・38参照） 良き牧者よ、御身は自ら

最初の働き人を刈り入れのためお遣わしになりました。それは十二人の弟子でした。あれから二千年たった今、彼らの携えたメッセージは地の果てにまで広がり、私たちはその頃以上に、あの十二人の後継者たちが現代にも現われ出るよう祈らねばならないことを痛感しています。とりわけ、職位的司祭職につき、神の言葉と秘跡の力によって教会を築く人々、御身の名において聖体祭儀を行う人々が必要です。聖体こそ、御身の体である教会が絶えず成長を続ける原動力なのです。

御身に感謝いたします。普遍教会という立場から見れば、現在の召命の不足も克服されつつあります。大きな喜びをもって、私たちは世界各地で、若い教会でも、何百年にも渡るキリスト教の伝統を誇る国々でも、また、今世紀に教会がさまざまな迫害にさらされた地域においても、増えていく召し出しを目のあたりにしています。特別な熱意を込めて、祈りをお捧げ致します。特に世俗化の波に吞まれた社会、この世の精神が聖霊の働きを妨げ、若者の心に蒔かれた種が根付かず、あるいは育たぬ社会のために祈ります。

「聖霊を遣わしたまえ、地の面を新たにたまえ。」

天の花婿よ、教会は御身に感謝します。教会の始まりから、天の国のために聖別された独身制への召し出しは喜ばしいものとされてきました。そして何世紀にも渡って、教会内には司祭の独身という賜が保たれてきたからです。私たちは第二バチカン公会議と、今回の世界代表司教会議についても、御身に感謝を捧げます。両会議はこの賜を再確認し、教会の未来を開く正しい道であることを教えてくれました。この宝物はもうい器の中に入っていますが、私たちは秘跡の恩寵を通して一人ひとりのうちに働く聖霊の力を信頼します。そこでいよいよ熱烈に、私たちにも忠実に聖霊の力を協力することができるよう願うのです。

良き牧者キリストの霊よ、私たちがラテン教会の伝えるこの伝統を忠実に保つことができまじうように。「霊を消すな」（一テサロニケ5・19）と使徒も命じています。私たちが疑いに落ちることのありませんように、また他の人に疑いを起こさせることがありませんように。また、考えるだに恐ろしいことながら、司祭の生活と職務に関して、異なる霊性や選択肢を支持

するようないことがありませんように。使徒聖パウロも「神の聖霊を悲しませるな」（エフエゾ4・30）と教えています。

「私はあなたたちに牧者を与える。」この聖なる役務、御身がお与えになった司祭職において、犯した全ての過ちをお赦しください。「大いなる収穫」のために、共に全力をあげて働くことができますように。召命を呼び覚し、開花させるために必要なあらゆる手段を講じることでできますように。そして何よりも、たゆまず祈ることができよう、お助けください。主ご自身も「刈り入れの主」、働き人を刈り入れに遣わしたまえ

と祈れ」（マテオ9・38）と仰せになったのですから。

多くの面で神の国に無関心を決め込むこの世に直面するとき、良き牧者が使徒たちの心に注いでくださったあの確信が、私たちと共にありますように。「勇気を出せ、私はこの世に勝つのだ。」（ヨハネ16・33）何があるかと、この世は御父が愛し、御独り子をさえお与えになった、その同じ世界なのです。（ヨハネ3・16参照）

神なる御子の母、教会の御母、全ての民の御母よ、共に祈りください。私たちのために祈りください。（一九九二・十二）

真の協力とは

〈米国司教団へ〉

ローマ訪問中の米国司教団の皆さんと共に考えて

ゆきたいテーマの一つは、何度も取り上げることですが、教会と社会における、真の霊的・道徳的な刷新です。これは急を要します。間もなく教会創設二千年目を迎えるわけですが、この大きな節目は賤い主である御子の託身の秘義を思い起こさせま

す。聖霊は教会に向かつて清めと改心、霊的熱意の覚醒を呼びかけます。全教会が心惜しみなく応じるべき呼びかけです。二千年目の恩寵をむだにしてはなりません。（IIコリント6・1参照） それは、皆さんの教区共同体にとっては、霊的なビジョンや目的を失ってますます互いのつながりをなくしつつあ

不変の教え

る社会の中にあつて地の塩、世界の光となるため、より一層努力する時です。神が愛に満ちた摂理で被造物を支えておられるという真理も、主イエズス・キリストの救いの賜も、多くの人にはますます縁遠く感じられていくようです。二十一世紀を目前に、教会が直面する一大課題は、人間の超越的な運命と真の発展について福音のメッセージが何を語っているかを明らかにすることです。

第二バチカン公会議は神の計画の中に、天からの光と助けのあらわれを認めました。そのおかげで教会は、確信と保証をもつて目前の困難に立ち向かうことができるのです。私たち牧者の務めは、教会の刷新と強化を目指すものでなければなりません。「現代世界憲章」の言葉借りれば「神の計画に従って改善され、ついには完成に達する」(2番)ために行動を起こさねばなりません。教会改革は、交わりとしての教会の姿を念頭において行うべきである、というのが公会議の中心をなす基本的な考え方です。(一九八五年の臨時シノドス、Relatio Finalis, C.1参照) 聖伝という生きた源泉に端を発するコイノニア(交わり)としての教会論は、教会の必要とする真の改

革、「目に見える構造というよりも、教会のまことの本質と使命に関する中心ビジョンをさらに深く、効果的に実現させるものとして考える」(米国司教団への講話、八七・九・十六)というメタノイア(改心)をもたらしめてくれるでしょう。

信仰と規律を一致させる

● 実に教会共同体とは三位一体の秘義の核心に通じる深遠な現実です。三位一体においては、ペルソナは分かれていても神はただ御一方です。垂直方向の交わり、すなわち聖霊によって私たちの心に神の愛が注がれ(ローマ5・5参照)、イエズス・キリストにおいて新しい生命へと引き上げられる：それは、私たちのキリスト教生活の中心であり、基礎となる経験です。この恩寵が完成するのは、「神が全てにおいて全てとなる」(1コリント15・28)天の教会においてのみですが、それは神の似姿として造られた全ての人の到達すべき目標でもあります。(カトリック教会のカテキズム、no.1720-1722) 教会は救いをもたらす神の愛という至高の秘義をつねに宣言し、教え、秘跡として祝い、生活と行動全体を通して養わねばなりません。教会の刷新は、典礼や

カテケージスにおいても、司牧上、教会法上の実践や規則においても、どんな局面においても、恩寵が心の中で力を取り戻し、成長すること、また三位一体の神との交わりを深めることを目標にしなければなりません。今、問題にしているこの交わりは、崇高きまわりないとは言

教会における信徒の参加と協力とは、「キリストにおける互いの肢体である」人々の交わりとしての教会に相応しい霊的な連帯性のあらわれであると共に、洗礼を受けた人々が「聖職位階のたまものと霊の種々のたまもの」に満ちた共同体の中で、「互いに重荷を負っている」ことを示す確かなしるしです。

え、抽象的で疎遠な現実ではありません。これこそは全ての面で教会の組織と行動の基盤をなすものです。従って、教会内での水平方向の交わりを深めるために、教会の役職や組織、人間関係は何においても人々にキリストをもたらし、洗礼を受けた人々が信仰、希望、愛のうちに成長するよう導き、信仰と規律を一致させてキリストの肢体を築き上げることを目指さなければなりません。

ばなりません。

● 公会議によれば、また教会法の条文に記されているように、教会における交わりは、様々なレベルでの広範囲な諮問機関の設立を促しています。教会任務への効果的な信徒の参加は、小教区の評議会や財務委員会、小教区・司教区双方での各種活動のための委員会を通じて、各教区の発展のために重要なものとなつていきます。それらは成功をおさめていると同時に、まだ解決されない種々の困難を抱えていることも、皆さんはよくご存じです。信徒の協力者たちの教育や形成基盤の問題、信徒が奉仕する教区と小教区相互の絆を確立すること、など。皆さんは小教区での信徒の奉仕活動に関する有益なガイドラインを出して、信徒の役割についての第二バチカン公会議の教えを示し、シノドス後の使徒的勧告「信徒の召命と使命」に盛り込まれたそれらの教えの適用について述べておられます。「信徒はその知識、才能、識見に応じて、教会の利害に関する事柄について自分の意見を発表する権利、さらに、時にはそうする義務を持つている。」(教会憲章37番) 信徒は個人としても、ふさわしい組織を通じて、そうすることが

できます。(聖職者省 Omnes christifideles, 25.1.1973) 従って、信徒から出される提案や申し出に注意を払うと同時に、自らに委ねられた神の民の一部分を牧する者として与えられた神的権利、すなわち司牧者の自由と権威をも行使することは、教会の牧者の持つ責任なのです。教会における参加と協力のあり方を一般の民主的な基準で判断したり、「権力分散」の形態だとか一部の者の考えや利害を押しつけるための手段などが見なすのは間違いです。「数は多いがキリストにおける一つの体であつて、おのおのは互いに肢体である」(ローマ12・5) 人々の交わりとしての教会にふさわしい霊的な連帯性の表われと考えるべきです。位階制を持ち、聖霊に鼓舞され導かれた交わりである教会の真の姿を明らかに示す限り、このようなあり方は実り多いものと言えます。

キリストの精神に従って機能するならば、参加と協力は、洗礼を受けた人々が「聖職位階のたまものと霊の種々のたまもの」(教会憲章4番)に富む共同体に相応の方法で「互いに重荷を負って」(ガラタイア6・2参照) いることを示す、確かなしるしなのです。(…)

(九三・十二)

「教皇様の声」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部百八十円(送料とも) 一年予約送料とも二、〇五〇円から。詳しくは精道教育促進協会まで。

郵便振替 01130-8-72393